

# 保育者養成における模擬保育の意義

－保育者と観察者の役割による学びから－

大橋 奈希左

(教育学科教授)

藤元 恭子

(香川大学教育学部教授)

本研究では、保育者養成校の授業における模擬保育の計画において、学生達の「実践的指導力」につなげるために、「実践者」と「観察者」の役割を担うように設定し附属幼稚園の子どもを対象とした。実践者らの振り返りレポートをもとに検討した結果、実践者ら自身がそれぞれの実施内容・実践について改善すべきことに気づいていた。また、観察者の振り返りの共有によって、さらなる改善点及びどのように改善できるのかについて、具体的に気づき、学んでいると解釈できた。今回は対象者が少なかったことから、今後継続的に検討していく必要がある。

キーワード：保育者養成，実践的指導力，模擬保育，観察

## 1. はじめに

保育者養成校において、学生達が「実践的指導力」を身に付けることが求められている。保育者を目指す学生にとって、保育実習・教育実習は、養成機関ではできない貴重な体験である。三橋ら(2020)は、「大学における学びは、命題的知識(外部表象化・選定された知識・能力・技能)獲得による認知構造の変化に焦点があてられるが、保育実習・教育実習は『保育者との保育活動の協同的実践による、保育者の保育活動の実践知(暗黙知)の獲得』と捉えられる」と述べている。だが、長期間実施される実習は、学生のストレスを増加させる体験であるという指摘もあり(戸井ら, 2020)、実習前に様々な支援を行っておく必要がある。実習前に、保育者養成校の授業の中で、「実践的指導力」につながる学びを実現するために、何ができるだろうか。

本研究は、「保育実習・教育実習を迎えるまでに、保育者養成校の中で、学生は何をどのように体験しておくことができるのか」を問う研究の一部である。特に、保育者養成校の授業の中で、学生達の「実践的指導力」につながる体験を仕組むために、模擬保育をどのように計画す

ればよいかについて、具体的な事例をもとに探ろうとするものである。

田村ら(2021)は、保育実習によって、コミュニケーション力、保育計画力、保育展開力といった具体的な保育実践力が向上することを明らかにしており、これらの力は、子どもとの関わりという保育の最も主要な側面に関わる実践力であり、特に実習で経験する保育的行為と直結するものであると考えられるとしている。子どもと関わる体験を通して、「コミュニケーション力」、「保育計画力」、「保育展開力」といった具体的な「実践的指導力」、言い換えれば、「保育実践力」が身についたということであろう。

古和ら(2024)も、「学生が責任実習を任される際には、子どもたちの実態を捉えた考察によって子どもを理解する力と、それを踏まえた保育を構築するための計画力・実践力・省察力等が必要とされる。」とし、模擬保育を3回行い、保育実習未経験学生の認識の変容を分析している。その結果、「模擬保育の回を重ねるごとに、子どもたちの姿からイメージした保育の構想一例えば、子ども同士で遊びを楽しむ様子や子どもの興味関心を起点とする、この遊びを取り入

れたときの子どもたちの反応を想像する一に意識が向けられているといえる」と述べている。古和らの模擬保育の実践では学生を対象としていたが、本研究では、保育者養成の授業において、模擬保育を計画する際に、附属幼稚園の子ども達を対象とし、子どもとの関わりの体験を仕組むことにした。

一方、保育実習評価票から保育実習生に求められる力を検討した本村(2021)は、「学生の中には、理解は出来ていても行動に表わしていない者もいる。自分では笑顔で保育に携わっているつもりでいるが、他者から見ると笑顔が全く足りていないということである。“やっている”“できている”と、自分の思い込みで判断するのではなく、保育者としてはどうなのかと常に問いかけながら自分自身の姿を客観的に捉えようとする姿勢が必要である」と述べている。本研究において模擬保育を実践する場合にも、同様の問題点が予想されることから「模擬保育の計画段階において、学生達が「実践者」と「観察者」の役割を担うように設定し、「観察者」の気づきの共有からさらに協働的な学びにつながるように進めることにした。

## 2. 本研究の目的と方法

### (1)目的

本研究では、附属幼稚園の子ども達を対象とした模擬保育において、保育者役を実践者と呼ぶことにする。そして、学生が観察者と実践者の役割を担うことによって、どのような気づきや学びがあるかを明らかにすることを目的とした。そのために、実践者及び観察者のレポートフォーマットを共同研究者で協議を重ねて決定した。

### (2)対象・時期・内容

本研究では、K大学「幼児体育」（開講時期：2年次前期）の附属幼稚園での模擬保育を対象とした。

実施日：2025年5月8日

指導対象：4歳児クラス・5歳児クラス

受講生：実践者3名×2グループ

観察者：それぞれ7名ずつ

実践概要：4歳児クラス表1、5歳児クラス表2のとおり

2グループの実践後、大学へ戻り、観察者からのコメントの後、実践者による振り返りを行った。

実践者用レポートフォーマットは下記のとおりとした。

### 幼児体育運動遊び園実践 実践者振り返りシート G

学籍番号	氏名
実践日(5/8)	年齢(4歳 5歳)
実践順(T1 T2 T3)	

#### 1. 立案・計画について

よかった点

改善点

#### 2. 子どもたちへの指導(全体説明・示範)について

よかった(うまくいった)点

改善点

#### 3. 遊びを進行する中で、子ども達それぞれに声かけや配慮・賞賛について

よかった(うまくいった)点

改善点

#### 4. 観察者の振り返りから気づいたこと・考えたこと

また、観察者用レポートフォーマットは下記のとおりとした。

### 幼児体育運動遊び園実践 観察者振り返りシート 学籍番号 氏名

1. 計画した実践内容は、子どもたちにとって適切であったか

保育者養成における模擬保育の意義

- |  |   |
|--|---|
| <p>2. 実践者の子どもたち(全体)への説明や示範は適切であったか</p> <p>T1( )</p> <p>T2( )</p> <p>T3( )</p>        | <p>4. 実践時間(全体の長さ・配分)は適切であったか</p>  |
| <p>3. 遊びを進行する中で、子ども達それぞれに声かけや配慮・賞賛ができていたか</p> <p>T1( )</p> <p>T2( )</p> <p>T3( )</p> | <p>5. 実践空間(広さ・場づくり・設定)は適切であったか</p> <p>6. 実践でよかった点</p> <p>7. 改善点と提案(自分ならこうする こう考える)</p> <p>8. 全体感想</p> |

表1：4歳児対象模擬保育「だるまさんがころんだ」実践概要

項目	内容
1.ねらい	・伝承遊び「だるまさんがころんだ」を通して、基本的な「動く・止まる」の動きを楽しみながら経験する。・さまざまな「だるまさん」を演じることで、表現力や想像力を引き出す。・昔ながらの道具を使わない遊びに触れ、仲間との関わりを深める。
2.対象	・4歳児クラス・実施日：R7年5月8日(木)9:00～9:30・場所：リズム室
3.実践内容	<活動の流れ>①導入(9:00～9:10)・「だるまさんがころんだ」の手遊びで活動への興味を高める。②ルール説明(9:10～9:15)・実演や分かりやすい言葉で遊び方を共有。③主活動「だるまさんの一日」(9:15～9:30)・リズム室で、いろいろな「だるまさん」を表現しながら遊ぶ。
4.援助の留意点	・手遊びや声かけで子どもの集中を促す。・理解が難しい子には個別に声をかけ、活動に戻れるようにする。・実践者自身が動きを実演し、視覚的に分かりやすく伝える。・鬼役ではない実践者が子どもと一緒に参加し、安心感を与える。

表2：5歳児対象模擬保育「追いかっこ遊び ネコとネズミ」実践概要

項目	内容
1.ねらい	・追いかっこ遊びを通して瞬発力や判断力を養う。・猫やネズミになりきって遊ぶことで、身体を動かす楽しさを味わう。
2.対象	・5歳児クラス・実施日：R7年5月8日(木)9:45～10:15・場所：運動場
3.実践内容	<活動の流れ>①導入(9:45)：実践者の話を聞く／キャラクタークイズ／くじ引きでチーム決定。耳(帽子)を装着。②追いかっこ活動(9:45～10:15)：猫とネズミの鬼ごっこ。・ルール説明 → 練習 → 一回戦(通常) → 二回戦(言葉のひっかけ) → 三回戦(同様)。③まとめ(10:15)：実践者の話を聞いて活動を振り返る。
4.援助の留意点	・集まりにくい幼児には声かけを行い、活動に参加しやすくする。・ルール説明では実践者が実演し、理解しやすくする。・運動場では人との距離を適切にとり、安全に動けるよう配慮する。・陣地の中では追いかけないなど、安全面のルールを明確化する。・イラストを用いて視覚的に分かりやすく説明する。・はっきりした声で伝え、言葉のひっかけルールも理解できるよう援助する。

### (3)分析対象

本研究では、レポートの中でも、特に実践者本人が気づいていた「改善点」と観察者の振り返りから気づいたこと・考えたことに焦点を当て、分析・考察することとした。

### (4)倫理的配慮

本研究は、香川大学教育学部・教育学研究科研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得た（承認番号：2405）。研究の実施にあたっては、研究目的、方法、参加は自由意志で拒否による不利益はないこと、及び、個人情報の保護について、文書と口頭で説明を行い、書面にて同意を得た。

## 3. 実践者による改善点の記述の分析

共同研究者2名で、4歳児クラス及び5歳児クラスの実践者のレポートに記述された改善点を1文ずつカードにし、KJ法でグループ分けを行った。

### (1) 4歳児クラス

4歳児クラスの実践者達の気づいた改善点は、5つにグループ化できた。1つ目は「時間があまってしまったので、時間の計算をしっかりとる」「鬼までの距離が少なすぎた」など、「**時間・空間の使い方**」に関する改善点、2つ目は、「子どもも鬼をしてもらおうと思っていたが、4歳には難しかった」「うまくいかなかった時の予測をして、対応を考えておくこと」など、「**予測不足**」に関する改善点、3つ目は「1人ひとりの話をききすぎるとみんなしゃべってしまってなかなか進行できなかった」「盛り上がって話をあまり聞いてくれなくなったときにどうやって聞いてもらえばいいか迷った」など、「**説明・進行中の子どもへの対応**」に関する改善点であった。また、4つ目は「子どもたちが楽しくなって走りまわったりしたときにどのような声かけが適切か分からなかった」「鬼をやりたい子が増えてしまった時の対応」など「**積極的な子どもへの対応**」に関する改善点、5つ目は「『やらない!』といった子どもたちの中で本当にやらなかった子に興味

をもってもらうにはどうすればよかったのか」「遊びに参加したがらない子ども4.5人いたので、その子どもたちを見る子がいることを考慮して役割を考えるべき」といった「**消極的な子どもへの対応**」に関わる改善点であった。

### (2) 5歳児クラス

5歳児クラスの実践者達の気づいた改善点は、4つにグループ化できた。1つ目は「子ども達をどう並ばせるかなど細かい動きの部分まで決めて指導案に記載しても良かった」「導入を工夫すればよかった」など「**準備不足**」にかかわる改善点、2つ目は「全体的にもう少し詳しく説明をするべきだった」「質問をもっと説明に入れても良かった」など「**説明内容及び方法**」に関する改善点、3つ目は「ジグザグに進まないことを伝える」「飲み込みが早く、すぐにゲームを理解してくれたので、もう少し要素を増やしてもよかった（3回戦目）、ジャンプですすむ、けんけんですすむなど」のような「**展開の工夫不足**」に関する改善点、4つ目は「泣いてしまった最初につかまってしまった子に対するフォロー」「こけた子への対応→ゲームを止めずに対応するには?」のような「**負けた子ども・転んだ子どもへの対応**」に関わる改善点であった。

このようにグループ化してみると、「予測不足」「準備不足」といった「保育計画力」につながる気づき、「時間空間の使い方」「説明内容及び方法」「展開の工夫不足」といった「保育展開力」につながる気づき、「積極的な子どもへの対応」「消極的な子どもへの対応」「負けた子ども・転んだ子どもへの対応」といった「コミュニケーション力」につながる気づきがあったことがわかる。

## 4. 観察者の振り返りからの気づきと学びについての考察

### (1)4歳児クラス

4歳児クラスのT1は、自身の改善点についての記述では、「時間と空間の使い方が難しかっ

た「子どもたちが楽しくなって走り回ったりしたときにどのような声かけが適切かわからなかった」のように、改善すべきことには気づいていたものの、どのようにすればよいかは書かれていなかった。しかし、観察者の振り返りから気づいたこと・学んだことの記述では、「紙にまとめて計画を練るだけでなく、実践して見ないとわからない問題点が多くでてきた。4歳児さんがうまくできること・できないことをしっかり分かった上で、計画や遊びの種類を検討できるようにになれば、実習でも活かせる学びになると思うので、自分たちの実践演習がおわったから放っておくのではなく、他のグループからのフィードバックをもとによりよい案を考えていきたい。」としており、観察者の振り返りの共有を通して、子どもの発達段階に合わせて内容を選定し計画することの重要性に気づいていた。また、「自分はまわりの子の声かけだけに気をとられすぎていて、横でじゃれあっている子に意識がなかなか向かなかったので、具体的な改善案を考えることが、観察者さんからの指摘を通して気付けた。」と書いており、実践者が目の前のことに集中している際の観察者の存在の意義も見出すことができていた。

4歳児クラス T2 も、自身の改善点では、「子どもが1人1人説明中に喋ってしまっていたのを聞きすぎて進行しにくくなってしまった。」「盛り上がって話をあまり聞いてくれなくなったときにどうやって聞いてもらえばいいか迷った」といった記述も見られたが、観察者の振り返りから気づいたこと・学んだことの記述では、「参加している子たちに目線をしっかり送るようにする。走っている子とぶつかると危ないので、場所を移動させる。子どもたちの特性もリサーチをしっかりとる。実践者と子どもの目線をあわせて説明する。鬼を1人でするのではなく、順番にする。」のように、どのように改善すべきなのかを書くことができていた。

4歳児クラス T3 は、「説明中に話す子への対応、『やらなーい』と一緒に遊んでくれなかった子への対応、走ったり、とまらなかつたりする子への声かけ・工夫、鬼をやりたい子が増え

てしまった時の対応」のように書いていたが、観察者の振り返りから気づいたこと・学んだことの記述では、「鬼を交代してもよかったかも、安全面への配慮、最初の距離感（自分たちが座って目線を合わせる）、リサーチを活かす（役割分担など）」と改善案や確認すべきことが書けていた。

## (2) 5歳児クラス

5歳児クラス T1 は、自身で改善点を書く際から、「何のために何をするのか伝える、トムとジェリーについての説明をもっとすべき、分かりやすく進めるために最低限説明しないといけないことを理解しておかないといけない、どうして耳があるのか、つけてほしいのか、なんでクイズをしたのかを自分で考える」のように、改善すべきことを書けていた。観察者の振り返りから気づいたこと・学んだことの記述では、「指示するのではなく自然とそうなるように、つかまえたつかまえていないの判断を私たちがすべきかいなか、並ぶときおいかけるよりも動作で示すとよかった、シルエットクイズの時答えとシルエットが違った、そこに対するフォローがあってもいいかも」のようにさらにできることの可能性やすべきことについて書くことができていた。

5歳児クラス T2 は、T1 が「T2 に頼りきってしまった」と書いていたように、積極的に実践していたが、レポートの記述は少なかった。自身の改善についての記述では、「導入を工夫すればよかった、あきっている児童がみられた、安全面に十分留意できていなかった、遊びを進行する中で、子どもたちそれぞれに捕まった幼児の中で、中に戻っている子もいた」としており、観察者の振り返りから気づいたこと・考えたことでは、「全体の勝ち負けを見つつ、適切な声かけができればよかった」としていた。

5歳児クラス T3 は、自身の改善点についての記述では、「子ども達をどう並ばせるかなど細かい動きの部分まで決めて指導案に記載しても良かった、質問をもっと説明に入れても良かった、飲み込みが早く、すぐにゲームを理解して

くれたので、もう少し要素を増やしてもよかった（3回戦目）ジャンプですすむ、けんけんですすむなど、つかまってしまった子に役割があればよかった？」とどのように改善できたかを書いていた。観察者の振り返りから気づいたこと・考えたことでは、「道具があると子どもが楽しめると分かった、一緒に遊びに参加できるのはスムーズな進行につながる、やりたくない子どもは無理にさそわない、モデルの動きがあると子どももわかりやすい、天候に左右される案代替案が必要、表情!!!、勝ち負けの調節ができた」などさらに指導のポイントを明記することができていた。

鈴木ら（2016）が、実習終了直後に学生が記入した「実習を終えて最も印象に残っているエピソード」のワークシートに取り上げられた事例から学生の観察場面の特徴を検討し、「自分自身の経験を通して、子どもと充実した遊びが展開できた経験や、日常生活の中で子どもの成長・発達を読み取ることができた経験が、保育の計画には必用不可欠である。学生の観察場面の分析から、保育者の援助について、現在実習での観察・考察十分ではない状況が明らかになった。」としていたことをふまえると、実際の保育実習・教育実習における「観察実習」では、経験を積んだ保育者らの指導・援助を見ていることから、当たり前になされている準備や声かけの必要性に気づくことができないこともあるかもしれない。今回、自分と同じ実習未経験の学生の指導・支援についての観察は、不足なことに気づききっかけを与える体験になっていたのではないだろうか。

## 5. まとめ

本研究では、保育者養成校の2年次前期の授業における模擬保育を、学生達の「実践的指導力」につなげるために検討してきた。

4歳児クラス「だるまさんがころんだ」の模擬保育で、実践者達が気づいた改善点は、「時間・空間の使い方」、「予測不足」、「説明・進行中の子どもへの対応」、「積極的な子どもへの対応」、「消極的な子どもへの対応」の5つに関わる改

善点であった。5歳児クラス「追いかけてあそび ネコとネズミ」の実践者達の気づいた改善点は、「準備不足」、「説明内容及び方法」、「展開の工夫不足」、「負けた子ども・転んだ子どもへの対応」の5つに関わる改善点であった。

これらは、「保育計画力」につながる気づき、「保育展開力」につながる気づき、「コミュニケーション力」につながる気づきであると捉えられた。

大石ら（2017）は、運動遊びにおける保育実践力の向上には、実習の経験だけではなく、実際に運動遊びに関わる保育を実践する経験が必要不可欠であると述べており、本研究においても、実践者らは、各自が改善点を考えた後に、観察者らの振り返りを共有したことにより、気づきと学びがあったと解釈できた。観察者らも自分達と同様の経験のない実践者の指導・援助を観察したことは、足りないことに気づく機会になっていたと考える。

今回、「実践者」の役割の学生たちが附属幼稚園の子どもたちと遊ぶ実践を見た「観察者」の役割の学生にとっても気づきがあり、その気づきの共有という協働によって、「実践者」にも新たな気づきや学びがあったとすれば、今回のように模擬保育を仕組むことには意義があるのではないだろうか。

山田(2012)は、責任実習の実践報告から幼稚園教育実習における保育実践力の学びについて考察する中で、「保育実践力」の3つの力(1)指導計画を作成する力(2)保育を展開する力(3)保育実践を省察し今後の課題をもつ力を定義している。今後は、模擬保育を計画・設定し、実践した後には改善点についての気づきを明らかにしつつ、その気づきを「保育実践を省察し今後の課題をもつ力」へと高めていけるように、振り返りレポートの内容と気づきの共有の仕方についてもさらに検討していく必要がある。

今回は実践者・観察者ともに人数が少なかつたことの限界もあることから、次年度以降も違った指導内容の実践も含め、検討を続けていきたい。

引用文献

- 古和友子他(2024).「模擬保育に対する保育実習未経験学生の認識の変容—実習指導の充実に向けて—」.『くらしき作陽大学研究紀要』,57(2),41-47.
- 三橋功一他(2020).「幼稚園教育実習の学びの省察に焦点をあてた短期大学幼稚園教育実習事後指導のプログラムの開発」,『函館短期大学紀要』,47,71-83.
- 本村弥寿子(2021).「保育実習生に求められる力について—保育実習評価票から探る」.『長崎女子短期大学紀要』,46,69-73.
- 大石祥寛・倉岡豊美(2017)「運動遊びの指導力に対する模擬保育実践の効果」『宮崎学園短期大学紀要』,10,15-24頁.
- 佐々木郁子・柳沼真美子(2024).「2023年度幼稚園教育実習後のアンケート結果分析～教育実習事前事後指導の内容の向上へむけて」.『郡山女子大学紀要』,60,247-256.
- 鈴木彬子(2016).「保育所実習(保育実習Ⅰ)における学生の観察場面について—エピソード記録の文責をもとに—」.『松山東雲短期大学研究論集』,46,1-8.
- 田村隆宏他(2021).「保育実践力向上に及ぼす保育実習の効果とその促進要因の検討—子どもとの関わりに関する保育実践力に着目して—」.『応用教育心理学研究』,38(1),63-75.
- 戸井和彦他(2020).「保育者養成校の学生におけるソーシャルスキル・保育者効力感・コーピングの関連について(実習年度と実習前・後の比較から)」.『聖カタリナ大学研究紀要』,32,45-64.
- 山田秀江(2012).「幼稚園教育実習における保育実践力の学びに関する一考察—責任実習の実践報告から—」.『四條畷学園短期大学紀要』,45,51-61.

【資料】観察者振り返りシート

7.改善点と提案(自分ならこうする こう考える)

4歳児「だるまさんがころんだ」

観察者 A:遊びの時間の中の役割分担(鬼を交代するなど)、安全面への配慮、参加しない子をどうするか?全体とのきは視線を送る、自分が近くに行ける時は積極的に行く、ねらいをもつ・自分が楽しそうにしている姿を見せるなどその

子の心がひかれるアピールの仕方をする。

観察者 B:途中で場所かえてもよかったかも、外ですとか

観察者 C:前で3人で手遊びをしていた時に、子どもが話を聞いていなかった事があったので、1人か2人が子どもたちの方で混じって手遊びをしてもいいのかなと思いました。

観察者 D:走っている子の進路に座っている子がいて、安全面への配慮がもう少しあるといいと思った。(後ろや横で見ると声をかけるなど)やりたがらない子にもっと目線を送るといいと思った。

観察者 E:はしこの所に立っていない子、後ろの方にやっていない子がいて立ち上がったとき危ない

観察者 F:「立ってみよう」のところで立っていない子にそっと声をかけたり、視線を向けたりしてもいい。「鬼したい子」戻ってといったあとに来た子がいた。鬼の順/鬼の言いたいことが混雑→1人ずつきく等。「進行すること」にとらわれず、じゃれている子がゲームに意識がもどるような声かけを気づいた時にする。

観察者 G:最初の手遊びの時間をもっと長くともってもよかった。

5歳児「追いかけてこあそび ネコとネズミ」

観察者 H:一緒に前出ている人がいるねずみチームは前に出れていたが、ねこチームがなかなか前に行けてなかったなので、難しいかもしれないが、指導者が前に出てあげるとよいと思った。

観察者 I:シルエットと答えをそろえるともっと分かりやすいのではないかな。

観察者 J:説明する時の表情が少しかたかった。笑顔大事だと思う。

観察者 K:該当項目記述なし

観察者 L:雨天の場合の代替案

観察者 M:負けたチームへの声かけがもう少しあると、さらに楽しめると思った。

観察者 N:クイズのかげと絵をそろえる。ねずみ!ん?ジェリー

8.全体感想

4歳児「だるまさんがころんだ」

観察者A：「だるまさん」はみんな知っているみたいだったけど、オリジナリティある「だるまさん」になっていて、おもしろいと思った。（だるまさんがふろに入った・カチンコチンなど）会話から遊びに自然に繋げていたのでよかったと思う。

観察者B：子どもたちが楽しそうですねすごよかったと思います。子どもの声をひろうのが上手だと思いました。どんどん遊びが広がっていくのがいいなと思いました。

観察者C：最初は子どもが「やりたくない！」と言ったり、中々説明を聞かなかったりでどうなるかと思ったけど、褒めてみたり、1人の目を見て声かけをしてみたり、自分たちが前で楽しそうに遊ぶことで子どもの気を引いて、最終的にはみんなで楽しめていてよかった。

観察者D：やりたがらない子がいた時や時間が余った時に手遊びをもう一度するなど臨機応変に対応できていた所がとてもよかった。やりたがらない子が思ったより多く、やりたがらない子への声かけや話し出す子の話をどこまで広げていいのかが難しいと思った。

観察者E：楽しそうにしていた

観察者F：前に立つ先生が楽しんでいたから、子どもにもその気持ちが伝わったのかなと感じた。応答的にかかわりの中で子どもが思いっきり楽しむ姿が見られてよかった。

観察者G：子どもたちが全体を通して楽しめていた。

5歳児「追いかっこあそび ネコとネズミ」

観察者H：子どもたち全体を動かすのが上手で、スムーズに進行できていたのがすごいと思った。耳とかパネルとかがあるのも分かりやすくとてもいいなと思った。声かけがとても上手だったので、真似したい。

観察者I：スムーズにすすんでいたし、子どもたちもワクワクするようなルール説明やゲーム簿展開がとても参考にしたいと感じた。

観察者J：ただの鬼ごっこではなく、トムとジェリーの要素を入れたり、白線で区切ったオリ

ジナリティを含んでいたりして、おもしろいと思った。最後に耳をあげて、「またみんなでもやってみてね」と今後につなげていたのが良かった。

観察者K：ペープサートでみんなの気を集中させるのも、グループ分けの流れで持って行くときに子どもに問いかけ、反応・賞賛をするもの上手で、ゲーム中に「大丈夫かな?」「準備できた?」など確認していてよかった。

観察者L：全体的にスムーズに進めることができていてよかったと思う。遊びにオリジナリティーがあっっておもしろかった。役割分担がはっきりしていてよかった。クイズ・くじ引き・ゲームと要素が多くて、子どもたちがあきないような工夫があったと思った。

観察者M：ネコとネズミの耳に子ども達が思ったより反応していて、子どもたちの興味を始めから引いていたので、視覚的な楽しさも大切だと思った。耳をつける時や遊びの途中に子どもの反応をよく見れていたと。子どもたちと一緒に遊びを楽しんでいたりを自分の実践に活かしたいと思った。

観察者：子どもが戸惑う場面がなく、スムーズに流れていたと感じた。注目の集め方がそれぞれいいなって思い、真似したいと思った。一斉に動く遊びの中で一人一人みることは難しいが、転げた子にそっと声をかけたり、遊具で休むこの気持ちを尊重したりと、周りが見れていたと思った。勉強になりました。